



RIYONA

リョナモンクエスト特別先行CG集Vol.2

# Ryonamon Quest

## RQ 2020 H [絵画化]

翠×リョナモンクエスト



**RIYONA**  
ريونا

それは、封印の祠から続く  
不気味な森にひっそりと  
佇むという怪しげな館の話。



RIYONA  
مطعم ريوونا  
مطعم ريوونا

その館を見かけた途端、まるで誰かに呼ばれるように引き込まれてしまいうらしい……

——魂を呼び寄せる館の噂を聞いたことがあるか？ ギルドに設けられた冒険者達で賑わう酒場の一角で、とある戦士達がそんな話しをしていた。——どうせ廃棄された館に住み着いたゴーストの類だろう。ゾンビや白骨が蘇り動き回るこの世界で、幽霊の類というのは然して珍しいものではない。

——それよりもっと金になる仕事の話はないのか？ そう言い放った男の言葉を皮切りに、酒の肴は近年以前よりも活発になってきた魔物の討伐依頼の話題へと切り替わってゆく。日々大陸の至る所を探索し、生死を掛けた冒険者家業をしている者たちにとって、そんな得体の知れない館の話など、数ある眉唾な噂話の一つに過ぎないのだった。

「ここは今日も賑やかね。あたしもパーティーつてやつを組んでみようかしら？」

酒を飲んで盛り上がる荒くれ者達を横目に、ギルド長への報告を済ませた勇者リヨナは一人颯爽とギルドを後にする。その館の噂が彼女の耳に届くことはなかったが、まさか数日後に勇者リヨナがその館に脚を踏み入れることになるとは、その場にいた誰も知り得ることではないのであった。



翠×RYONAMON QUEST

# 絵画化



RIYONA  
ريونا

封印の祠から続く薄暗い森を探索していたリヨナは、深い森の奥で怪しげな館を発見する。

「こんな森の奥に立派な建物……一体誰が？」

不審に思ったリヨナは周囲を見回してみるも、どうやら人が生活しているような気配や痕跡は感じられない。にも関わらず、誰かが手入れでもしているかのように館の外見は寂れていなかった。「つい最近まで、人が暮らしていたのかしら？」

——何か冒険に役立つ有益な物が手に入るかもしれない。もちろん、まだ人が居るのなら勝手にいただくわけにはいかないけれど……。どういうわけか無性にその館の存在に気を引かれたリヨナは、気が付けばまるで吸い寄せられるように、入り口の扉に手をかけていた。

「誰か……居ないの？」

薄暗い広間はしんと静まりかえり、リヨナの呼びかけだけがずっと静寂へと飲み込まれてゆく。どうやら本当に無人のようだ。しかしそこで彼女はふと、小さな違和感に気が付いた。

「なんで、蝋燭に火が……やっぱり誰かいるんじゃない？」

いや、自分は何を言っているんだろう。ここは立派な城館のエントランスで、客人を出迎えるには明かりが付いていて当然ではないか。——でもそれは誰が？ そんなの、館の使用人に決まっている。——そうだ。私は歓迎されているんだ。わたしは、お客様。何も……おかしいことはない……気が付くと、リヨナは広間の壁に飾られた一枚の絵画の前に立ち尽くしていた。

「……あれ、私いつの間に……何かしら、これ。どうして、額縁だけ飾っているの？」

立派な額縁があてがわれているにもかかわらず、その中に収められているのはまっさらな画紙。リヨナは無意識に、じっとその額縁の前に立ち尽くしていた。そこでふと、額縁の下部に備え付けられたプレートに刻まれた文字に関する異変に気が付く。

「なんで……あたしの名前が……？」

不意に、先程まで空白であった筈の紙面に、うつすらと人の輪郭のようなものが浮かび上がっているのがわかった。——これは……あたし？

「どうして……」

そうリヨナの口からこぼれた言葉が、静かに暗闇へと広がり消えてゆく。やがて再び広間に静寂が訪れた時、先程までリヨナが立っていた場所には、何者の姿もなくなっていた。



「んぐううう!？」

一体自分の身に何が起こったのか。先程まで額縁の前に立っていた筈のリヨナの身体は今、亜空間に捕らわれていた。——身動きが取れない——全身を押しさえつけられるかのように、四肢を開いた状態で身体が固定されているようだ。かろうじて動く眼球を最大限に見張って状況を確認しても、身体を押しさえ受けているような何かを視認することはできない。

(なんなのよ……これは、一体……?)

魔法の類であることは間違いないだろう。しかし、状況がまったく読み込めない。身動きのとれない苦しきや窮屈さはあるが、痛みや苦しみがあるわけでもない。一体誰がなんの目的で、こんなことを……

ここでふとりヨナは、亜空間の奥に窓枠のようにポツカリと空いた穴があり、その先に何か景色が広がっていることに気が付いた。いや、窓枠ではない。そう、あれは……「額縁」だ。それも、自分がじっと見つめていたあの中身がまささらな額縁に違いない。どうして彼女がそう確信できたのか。それは額縁の奥に広がる景色が、先程までリヨナが佇んでいた館の広間のそれであったからだだった。

(ここは、あの額縁の中なの……?)

彼女は今、絵画の中に閉じ込められていた。この館そのものが、不用意に近づいた冒険者を捕らえる呪いの館だったのだ。——なんとかして脱出しないと。そうリヨナが思い立った刹那、なにかふわりと暖かい空気が流れたような気がした。

(あれ、暖かい……それにこの匂い、なんだか懐かしいような……)

ふいに吹き抜ける風を肌を感じたと思うと、あたり一面にはとても美しい花畑が広がっていたのだ。



# うふうふう…… お母さん……



リヨナが佇んでいたのは、幼い頃に母と一緒によく遊んでいた故郷の花畑だった。風が吹くたびに花びらが舞い、甘く爽やかな香りが鼻先をくすぐる。気がつけば彼女は、あの頃と同じ服に身を包んでいた。やんちゃばかりしたおかげで、ツギハギだらけだけどその分、母の愛が込められた手作りの子供服。魔王が封印され、平和が訪れた世界では勇者の末裔に活躍の場はなく、リヨナの母は村人達と支え合い、封印の祠を守りながら娘と二人で貧しくも慎ましい生活を送っていた。これは、まぎれもないその時の記憶だ。

「うふう……お母さん……」

楽しかった思い出が蘇る。いや、蘇るのではない。

ここは記憶の中そのものだった。今、リヨナは過去の記憶の世界に居る。母を失う前の、幸せだった頃の記憶の世界に……

「お母さん。リヨナ、今日もいい子にしてたよ……」

「お母さん。今日は何して遊んでくれるの……?」

幸せなはずの記憶。しかし、幼い頃の服装に身を包

んだ彼女の頬には、二筋の涙が伝っていた。

「お母さん……おかあ……さん……」

やがて、リヨナは目の前に広がる景色のことだけを考えるようになっていた。魔王のことも、勇者として成すべき使命もともももうどうだっていい。ここでこうしていれば、きっとまたあの頃のように母が迎えに来て、この手を引いてくれる。そうして、二人で家に戻ってまた穏やかな日々を過ごすのだ。





RIYONA

Riyona is a character from the game 'The Legend of Heroes: Trails of Cold Steel II'. She is a young girl with short brown hair, wearing a light-colored dress with a pocket. She is standing in a field of autumn leaves, with pink petals falling around her.

リヨナが姿を消した広間では、それまで室内を照らしていた蝋燭の明かりが落ち、窓から注ぐ日差しがまるで完成した作品を誇らしく展示するように照らし出していた。記憶の世界から抜け出すことを諦めたりリヨナが、自らの力で閉じ込められた絵画の中から逃げ出すことは不可能であろう。少なくとも、誰かに助け出されるまでは……

——翠(みどり)の館——そう一部の冒険者達の間で呼ばれ恐れられていた呪われし館。それが、リヨナの魂を絵画の中へ閉じ込めた何者かの正体であった。この館は元々、最愛の人を病気で亡くした一人の画家が私財を注ぎ込み、アトリエとして建てたものだった。魔物が蔓延る森の奥に結界を張り、人間すら近づかないような僻地で一人余生を送るために造られたのだ。そうして孤独を手に入れたその画家は、生涯を掛けて最愛の人の美しい笑顔を描き続けた。それは、彼女がまた元氣だった頃、幸せだった二人の記憶の一片。そうして最後の日まで筆を握り続け、キャンパスの前で朽ちたその魂が宿り怪異となったのがこの館だった。

画家の魂は穢れ、今もこの館に囚われている。そして、館に近づく冒険者達を誘い館に招き入れては、まっさらな絵画の中に閉じ込め、魂を食うのだ。その方法は、幸せな記憶を蘇らせ現実に戻りたくないと思わせる他にも、夢を叶えさせたり、心が折れる程に精神を疲弊させたりと様々であった。絵画に囚われた魂は終わらない幻想に魅せられ続ける中で少しずつ館に蝕まれ、やがて色あせてゆく。額縁に収められた画紙がただの白紙に戻った時、囚われた魂はこの世から完全に消滅するのだ。

しかし、少なくともリヨナにとって、この結末は幸せだったと言えるのかもしれない。命を落とすほどに危険な戦いが待ち受ける過酷な運命よりも、大好きだった母と二人、記憶の中で消滅するまでの間、幸せに過ごすのだ。

こうして、勇者リヨナは、冒険の途中人知れず姿を消した。その後、彼女の姿を観たものは誰も居なかったと言う。











**RIYONA**  
www.riyona.com



**RIYONA**  
სახაერო-დაზღვევითი საზღვრის დაზღვევა  
სახაერო-დაზღვევითი საზღვრის დაზღვევა

翠×RYONAMON QUEST

## 絵画化全滅



RIYONA

「勇者が消息を絶ったというのは、この森だな」

配下の兵士に確認をとったのは、騎士団長のセシリアだった。魔王討伐のために封印の祠へ潜入していた勇者リヨナを援護するため自ら先陣を切り、リヨナの後を追ったセシリアであったが、祠から通じる怪しい森の中へと向かうリヨナの姿を見かけたという冒険者の目撃証言を最後に、その後勇者の姿を見たものは居なかった。

「あいつのことだ。無事で居る筈……しかし、もしもの時は、せめて亡骸だけでも……」  
そう呟いて拳を握りしめたセシリアの袖が、強く引っ張られる。

「勇者様は絶対に無事です！ セシリア、言葉を謹んでくださいますし！」  
そう涙目で訴えたのは、マリーであった。

「……落ち着け。お前は今、仮にも部隊を率いる立場だろう。分隊長が涙など見せるな」  
取り乱すマリーを、ミラージュがなだめる。殆どお飾りとはいえ、この行動においてマリーは分隊長として派遣され、部下を従えていた。隊を率いる存在が、弱い姿などは見せてはいけないというはもったもなことだろう。

消息を絶った勇者の搜索。勇者を打ち倒す程の強大な魔物が潜んでいるという可能性も配慮し、セシリア指揮の元で、封印の祠に潜入していた全ての部隊を集結し、慎重に搜索は行われていた。

「全隊、止まれ！」

森を進んだ先で、先遣隊の報告通りの怪しい館を視認したセシリアが号令を掛ける。

「あれか……よし、調査する。ミラージュ、私と来い。姫も、こちらへ」

「さて、何故これだけの人員が居るのに、わざわざ我々が……いや、確かにそうだな」  
言いかけたミラージュが、まるで自分が間違ったことを口走ったかのように訂正する。その場にいる兵士達にも、どういわけか団長の下したそのおかしな判断を不思議に思う者は誰も居なかった。

「古い館だが、様子がおかしい。埃一つ溜まっていないとは」

「きつと大勢のメイドさん達がおいでなのでは？」

「さて、ふたりとも。あれを見ろ」

部下を待機させ、館にたつた三人で乗り込んだセシリア達であったが、広間の壁に飾られた一枚の絵画を前にした時、思わずその脚を止めざるを得なかった。なぜならそこに描かれていたのは、自分たちが今まさに搜索している勇者リヨナの生き写しのような姿であったからだ。



「これは、リヨナ...?」

「鎧は着ておりませんが、このお顔は勇者様ですわ」

「……どういふことだ? こんな辺境の森の奥に、何かおかしい」

拭いきれない違和感に疑問を呈するミラージュであったが、時既に遅しとは正にこのことであった。なぜなら、三人がこの館に近づいた時には既に、館に惑わされていたのだから。

「うふふ……お母さん……」

突然、広間に女の笑い声が響いた。

「今の、勇者様のお声……?」

「これは、どういうことだ?」

「まずいぞ、これは……」

じつとリヨナの描かれた絵画を見つめていたはずの三人であったが、いつの間にかそれぞれにまっさらで何も描かれていない画紙が収められた額縁の前に立ち、互いにそれを覗き込んでいることに気が付く。

「これは……」

「私……か?」

「おい、逃げ……」

一人異変に気付いたミラージュが二人に逃げるよう伝えようとしたその時既に、先程まで隣に立っていた筈の二人の姿は跡形もなく消え去っていた。

「畏か……!」

踵を返し振り返った先にミラージュが見た光景は、遠く離れてゆくばかりと穴の空いた額縁であった。

「うぐ……」

「なんですの……」

「これは、一体……」

突然、まるでなにかに押し付けられるように身動きが取れなくなると、三人はそれぞれ三者三様の幻想に魅せられ始める。

「嫌ですわ……こんなの……!」

「そんな……ああ……だめ、だめえ……ううん……」

「これが……わたし……?」

「これが本当の、可愛いわたし……」

一体彼女たちはどんな夢や記憶を魅せられているのだろうか……

こうして三人は、奇しくも捜索していた勇者リヨナと同じ運命を辿ることになったのであった。